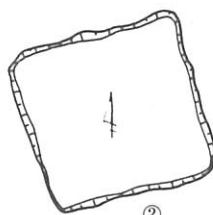
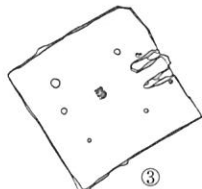
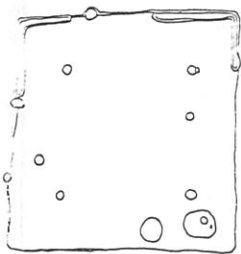
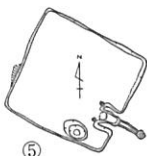
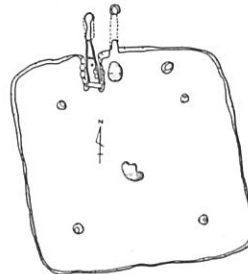
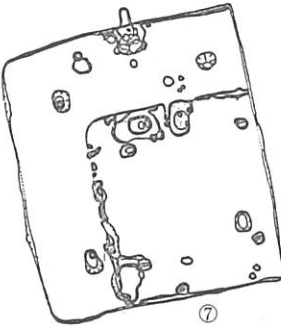
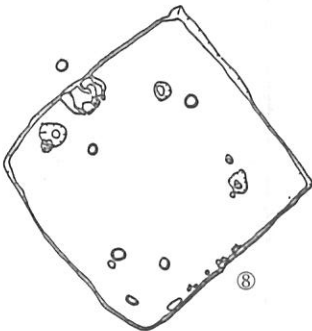
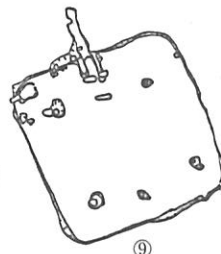

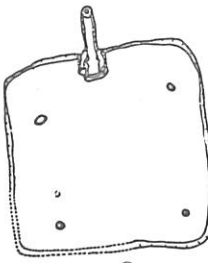
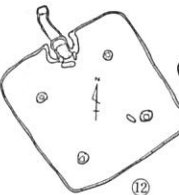
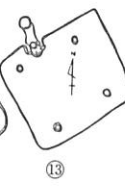
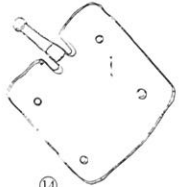
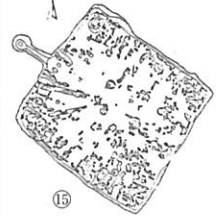
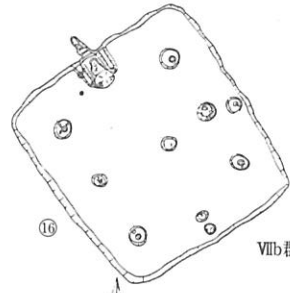


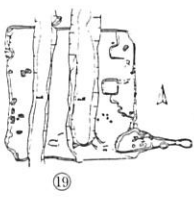
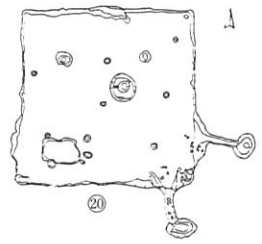
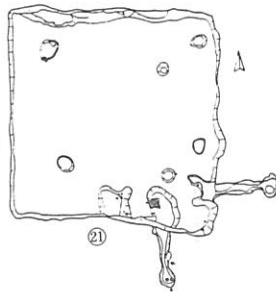
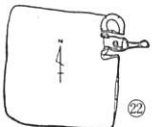
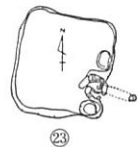


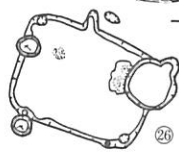


 <p>①</p> <p>I 群期</p>	 <p>②</p> <p>II 群期</p>  <p>③</p> <p>III 群期</p>  <p>④</p>	 <p>⑤</p> <p>IV 群期</p> <p>①③⑤は約180分の1 ④は約150分の1 ②は約100分の1</p>	古墳時代（I～IV 群）
 <p>⑥</p> <p>V 群期</p>	 <p>⑦</p>  <p>⑧</p> <p>VI 群期</p>  <p>⑨</p>  <p>⑩</p>  <p>⑪</p>  <p>⑫</p>  <p>⑬</p> <p>⑥⑫⑬は約180分の1 ⑦～⑪は約150分の1</p>		奈良時代・初期（V・VI 群）
 <p>⑭</p> <p>VIIa 群期</p>	 <p>⑮</p>  <p>⑯</p> <p>VIIb 群期</p>  <p>⑰</p> <p>⑭～⑰は約180分の1 ※提示遺構の少なさと実在する遺構数とは関係ない。</p>		奈良時代（VIIa・VIIb 群）
 <p>⑱</p>  <p>⑲</p>  <p>⑳</p>  <p>㉑</p>  <p>㉒</p>  <p>㉓</p>  <p>㉔</p> <p>⑱～㉔約180分の1 ㉕～㉗約150分の1 ㉘ 約180分の1</p>	 <p>㉕</p>  <p>㉖</p>  <p>㉗</p>  <p>㉘</p>		平安時代（VIII 群）
			平安時代末（IX 群）

第109図 岩手県南部を中心とした古代竪穴住居跡変遷図

参考資料(2) 岩手県南部を中心とした古代の住居跡の変遷(第109図)

表記について概述する。時期区分については既述の編年表にしたがう。

第Ⅰ～Ⅳ群期 古墳時代に相当するものであるが、Ⅰ・Ⅱ群期にはカマドが付設されない。四隅の角張った均正な正方形プランと、対角線上にのり、やや中央による4本の主柱穴をもつ。貯蔵穴様のものは既にある。規模に異同のあるものが組みあわせになる。Ⅱ群期にはカマドが付設されはじめるが、その状況にはばらつきがあり、斉一性はない。長大な煙道は未確認である。Ⅳ期群にはカマド本体・長い煙道部とともに備えたものも出現し始める。

以上の時期の竪穴軸方位は変化に富み、一定の傾向性は示さない。なおⅢ群期の西大畑例には主柱穴以外に西辺中央の壁直下に柱穴様の2ヶのピットもある。

第Ⅴ・Ⅵ群期 四隅に軽い丸味をもつほぼ正方形なプランと、先と同様に対角線上にのりが如くに配置された4本(稀な大規模例では6本以上)の主柱穴、北壁に付設されたカマドなどを有する構造をもつ。斉一性はかなり強く、構築法の確立を示すかのようである。ただし長大な煙道の有無にはばらつきがある。明白なそれをもたない若干例も混在する事実がある。カマド焚口部には礫を門状に配置する。それより古期と思われる例では、カマド本体部内外両面にも礫を用いるものがあり、さらにカマドの対辺(多くは南壁)中央壁直下にも柱穴様のものをもつ例がある。建物主軸方位は、磁北にほぼ一致→やや西に偏す、という変遷をたどらしい。一辺8m～6m程度の大規模なものと、5m以下の中小規模のものがセットになる。

Ⅶ群期 プラン・主柱穴配置などは前代に共通するが、建物主軸方向はさらに西に偏し、かつカマド袖部への土師器類(長胴甕型を主とするが、各種の器種がある)の芯としての埋置が見られはじめる。主柱穴は4本を中心とするが、6本のものもあり、さらにその存在が不明確なものも増加する。前代に比し不均整なプランをもつのが増加する。

Ⅷ群期以降 集落跡と思われる遺跡の例のみをとる。変化の度合いがきわめて大きい。

(1) 柱穴配置 主柱は4本と思われるが、そのすべて、あるいは2本が壁直下に寄るものも増加する。さらに柱穴配置の判然としない例がさらに増加する。

(2) 側壁 板材を用い、腰板乃至壁風、のものをつくり出す例も増加する。その四隅には支柱様のものが伴う。

(3) カマド構築部位 北壁も継続するが、東壁、南壁などへ変化する例が圧倒的に多くなり、かつ壁中央ではなく若干いずれかに偏した位置となる。江釣子村猫谷地においては南壁→東壁という変遷を示す。

カマド構築法は、本体にも板状礫を用いるもの、煙道部に甕を横転位に据えるものなども加わる。所謂くり抜き式のものが多い。

(4) (竪穴住居跡以外に) 掘立柱建物・井戸・大溝も集落の構成要素に加わる例も現われる。

X～XI群期 長方形プランで、側壁直下に多々の柱穴をもつ例が増加する。カマドなど特別な施設はほとんど見られない。これらの中には中世に入るものも含まれる可能性がある。

第Ⅷ群期以降については、遺跡の性格別の遺構の把握（構造・組みあわせ）が必要である。それは掘立柱建物についても同様である。

註①高山遺跡 TK02住	高山遺跡	岩手県水沢市文化財報告書第1集 高山遺跡調査委員会・水沢市教育委員会 昭和53年3月
②猫谷地遺跡 CH74住	猫谷地遺跡	CH74住居跡 岩手県教育委員会調査
③面塚遺跡 SI02住	面塚遺跡	現地説明会資料 水沢市教育委員会 昭和55年6月
④西大畑遺跡 Cf53住	西大畑遺跡	岩手県文化財調査報告書第60集 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅺ 岩手県教育委員会・日本道路公団 昭和56年3月
⑤膳性遺跡 G-15住	膳性遺跡	現地説明会資料 (財)岩手県埋蔵文化財センター 昭和54・55年 なお、膳性遺跡については、高橋与右衛門氏より各種教示をうけた。深謝する。
⑥〃 J-7住		
⑫〃 F-11住		
⑬〃 C-2-2住		
⑫〃 G-8-1住		
⑫〃 H-2	玉貫遺跡	現地説明会資料 (財)岩手県埋蔵文化財センター 昭和55年
⑭玉貫遺跡 I-12-1住		
⑫〃 C-11住	今泉遺跡	岩手県文化財調査報告書第60集 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅺ 岩手県教育委員会・日本道路公団 昭和56年3月
⑦今泉遺跡 Bg62住		
⑧〃 Bd59住		
⑨〃 Bd03住		
⑩〃 Bi24住		
⑪〃 Cb24住	石田遺跡	岩手県文化財調査報告書第61集 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅻ 岩手県教育委員会・日本道路公団 昭和56年3月
⑮石田遺跡 Df59住		
⑮〃 Dd03住		
⑮〃 Df09住		
⑮〃 Cb21住		
⑮〃 Cf56住	尻引遺跡	尻引遺跡調査報告書 文化財調査報告書第17集 北上市教育委員会 昭和52年3月
⑮〃 Da56住		
⑮尻引遺跡 第6号住	上平沢新田遺跡	岩手県文化財調査報告書第52集 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ 岩手県教育委員会・日本道路公団 昭和55年3月
⑮上平沢新田遺跡 Ah15	鳥ノ海A遺跡	岩手県文化財調査報告書第59集 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ 岩手県教育委員会・日本道路公団 昭和56年3月
⑮鳥ノ海A遺跡 第2号(Aj56)		
⑮〃 第3号(Ag53)		
⑮〃 第4号(Af03)		